報告５　デンマーク・スカナボー

田舎町スーロン再訪

日曜日の午後、ストックホルムからアーランダ空港を発ってデンマーク・カストラップ空港へ。空港駅から３駅目のコペンハーゲン中央駅で列車を乗り継ぐ（難民問題の関係で長距離列車はすべて中央駅発着になった）。

21 個のほぼ 20 キロのスーツケースを網棚の上に挙げる大騒動を終え、（メンバーの中に元山岳部など力持ちがいてくれて助かった）オーデンセのあるヒュン島への橋を渡るころに陽は落ちた。

ユトランド半島のほぼ中央部にあるスカナボーの駅は、コンビニと数台しかないタクシー乗場のオレンジ灯以外は暗い。タクシーに２往復してもらってたどり着いたホテルは静かな湖に隣接して月明かりに浮かんでいた。

朝陽が昇る７時前に湖畔を歩く。湖と雲と朝焼けが感動的だ。渡り鳥が南に渡っていくのをはじめてみた。https://youtu.be/iTwvSUneLSA

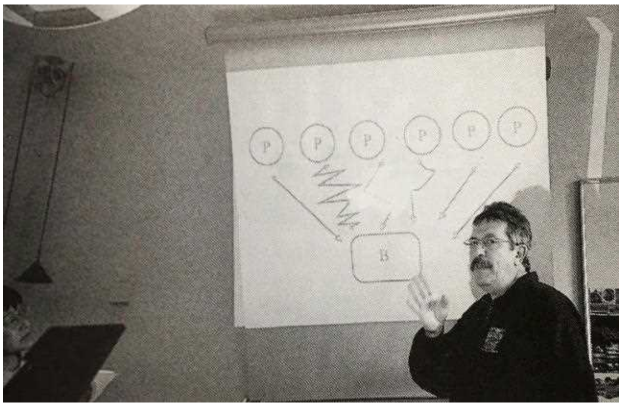
◆

スーロンは、デンマークにある 34 の自治体出身の 216 人の障害の重い人たちが、総勢 700 人のスタッフとともに、14 ブロックに分かれた「24 時間ケアのあるグループ住宅」で暮らしている。湖畔にあって東京ドーム５個分の 25 ヘクタールの広大な自然公園のようなところ。人口３万人のスカナボー自治体では「田舎町スーロン」と呼んでいる。わたしが訪問するのは４度目だ。顔なじみになったベテランの副施設長・トリーネさんが案内してくれた。

○ 1900 年代初め、ここには農園とレストランがあるだけだった。

○ 1935 年、重度知的障害者の国営の大規模収容施設（支所）がつくられた。

○ 550 人の障害者は、8 ～ 10 人部屋で、100 人のスタッフと自給自足。



○ 1970 年代から、２人１室の住居に改築、共同スペースを設けユニット形式に。

○施設解消の動きの中で全国に５か所あった大規模施設はスーロン以外は廃止。

○ 1990 年、前施設長＝モウリッツ・アイエンダール（オランダ人、**写真左下**）が就任。スーロンの解体は決定していたが、住人の親たちが、「町から近く、自然が豊富で安心して自由に暮らせるから」と解体に反対。

閉鎖は先延ばしし、住民たちの幸せのために何が必要かを検討した。

そういえば 2001 年、はじめてスーロンを訪ねたとき、モウリッツは言っていた。「最後の恐竜ディノザウルスだ。しかしけっして消えてしまうことはない」「ノーマライゼーションは、できるだけ人間として可能性をのばしながら生きていく場、社会をつくろうということだ」

○ 2007 年、自治体改革で、スーロンは「県」からスカナボーに委譲。

○スカナボーはスーロンを評価し、廃止を撤回、存続へ。

○住人の利用料は住人が生まれた自治体からスカナボーに支払われる。自治体予算の 3%を占める大きな収入源となり、町の雇用の支えにもなる。

○モウリッツは議員となり、福祉担当委員長に。バリアフリーのグループホーム型の住宅群建設計画が承認され、スヌーズレンハウスや研究施設の予算も認められた。
○スタッフ 700 人中約 450 人はヘルパーと看護師。医師、看護師、作業療法士、理学療法士などを含む 40 人の医療チームもある。また、デンマーク全土からの研修会場ともなっている。
○アクティビティ（日中活動）はグループでの活動もあれば、各住まいの居間でのとりくみもある。若い人を中心にしたグループ活動やプール、音楽療法、乗馬、動物のケアもある。
○気になる予算は年間 2 億 2300 万 DKK（約 35 億円）。住人の出身自治体からの「利用料」の支払いはスタッフの人件費になる。関係する自治体とは話し合いの場もつくっている。
○住人はそれぞれの障害者年金から家賃、食費などを支払う

＊

旅に同行してくれている深井さんによれば、
○デンマークの障害者の家計は、年金収入が約 14000DKK、支出＝税金 5000DKK ＋家賃と食事代など 7000DKK、残った 2000DKK で衣服や余暇費用含め自由に使う

「スタッフ同士の集団的な学びの実態はどうなってますか？」と品川団長が質問すると、
○新人スタッフには 1 日講義。外部専門家による講習会もある。

○新人にはメンターがつく（30 人が年 4 回勉強会）14 日ごとに、話し合う。
○労働組合でも講習会を開いている。①安心していられる、②価値があり愛されている、③他者に愛情を感じられる、④なかまと感じられるがポイント。

「葬儀などのあった場合はどうしてますか？」の質問には、
○グループ住宅に住んでいたらそこが「家族」となる。なかまの死ならば、棺に好きだったもの入れたり、歌を歌ったり、教会に行ったりする。実の家族の場合は、スタッフがいっしょに参列したりしている。時間をかけて悲しみをわかり、癒やしをはかっている。

「EUは長期入所施設の廃止を方針化したと聞くが、どう考えていますか？」とわたしの質問にトリーネは、「デンマークでは障害者や高齢者にしても、①住まいの確保、②住む人がどれだけのケアを必要とするかを考えます。一人でアパートに住めない人には支える人が必要です。今、デンマークではスーロン以外にも 100 人前後の規模の「新しい住まい」が広がっています。デンマークは EU とは違って、自分たちの判断で必要なことを決めていきます」

◆

たっぷり一日かけてスーロンを見学させてもらっ

た。
〇音楽療法の活動見学
〇高齢者が多く住むグループ住宅を見せてもらい、サンドイッチの昼食を食べながら、トリーネさんと懇談。
〇午後は北欧最大規模のスヌーズレンハウス見学
　スヌーズレンはオランダ語の「香りをかぐ」と「う

とうとする」をあわせた造語。香りや光、音、さわった感じなどで「快」と思わせる刺激を与え、ゆったりとした時間を楽しみ、心と体を解放させ、介護者とコミュニケーションを持つことといわれる。
　オランダ出身の前施設長は、1980 年代後半から普及しはじめたスヌーズレンもライフワークとしたかったのだろう。
　「デジタルのハイテク依存から、ローテクによるスヌーズレン設備の開発に転向するという話も聞きます」とスカナボーの近くに住む片岡豊さんが Facebook で教えてくれた。

◆

　夏至の頃の 3 日間、ここでスーロン音楽フェスティバルが開かれる。重い障害のある人たちの住むところに 8000 人がワイワイつどうのだそうだ。
（薗部英夫）

▼スーロンの訪問後、スカナボーの森の中にあるドイツ空軍の遺跡を探した。デンマークは圧倒的な強さのナチス・ドイツ軍に 3 時間で降伏（死者 13 人）。占領されたが、その日のうちにレジスタンス（抵抗運動）を組織した。
　コペンハーゲン大学の法学生・若きバンク-ミケルセンも参加する。国内ほとんどすべてのユダヤ人を中立国・スウェーデンに漁船などで逃亡させた。
　戦跡はスーロンの敷地内と湖近くのユースホステル側の森の中にあった。森の中の遺跡は広大で、空軍本部をしのばせ、一部は博物館になっていた。

　戦争の時代と現代の今は背中合わせであることを強く感じた。